

修士論文（要旨）

2016年1月

女子大学生における被服関心とコミュニケーションスキル及び
アイデンティティの関連

指導 井上 直子 教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
214J4003
五月女 梨紗

Master's Thesis (abstract)
January 2016

The Relationship among Clothing Interest, Communication Skills,
and Identity of Female University Students

Risa Saotome
214J4003
Master's Program in Clinical Psychology
Graduate School of Psychology
J.F.Oberlin University
Thesis Supervisor: Naoko Inoue

目 次

1	問題の背景と目的	1
2	方法	1
3	分析	1
4	予想される結果	1
5	結果考察	2

引用文献

1. 問題の背景と目的

被服は「第2の皮膚」とも呼ばれ、社会・心理機能としての被服は単なる「もの」以上に「人」に近い存在であり、社会的または心理的機能を含んでいると言える（藤原，1971）。また、言葉と同様に自己主張，自己表現をするツールでもある。

青年期は、自己表現や自己主張の最も盛んになる時期といわれており、その主張や表現は青年の服装にも表れると考えられる。青年期のアイデンティティを確立させながら他者と関係を築いていく過程を考察するためには、どのように他者と関わるのかという対人行動と、その行動を通して形成される内的感覚の両側面を明確にする必要がある。その媒介となるものとして、言語，コミュニケーションがあげられる。

コミュニケーションはさまざまな領域で研究されており、アイデンティティとの関連についても畑野（2010）によって心理社会的自我同一性とコミュニケーションに対する自信に関連があったことが報告されている。しかし個人の被服との関連を研究するものは未だない。

本研究では個人の被服関心が、主に青年期の問題として扱われてきたアイデンティティ、およびコミュニケーションスキルとどういった関連があるかを検討することを目的とする。また、被服関心とアイデンティティおよびコミュニケーションスキルとの関連を調査することで、学校現場での学生指導の一助に繋げられる可能性があるという点において、本研究の意義があると考えられる。

2. 方法

(1) 対象 「女性は男性に比べ「被服意識」がもっとも顕著であった」という曹（2009）の研究結果から、首都圏の私立大学の1年生から4年生の女子、412人を対象に調査を行った。

(2) 手続き 本調査で使用する服装の写真を選定するために、大学1年生10名を対象に予備調査を行った。本調査では、本研究の調査依頼に承諾を得られた学生に、質問紙を配布し調査を行った。回答は無記名で行ってもらい、質問紙の回収は留め置き法にて行った。

(3) 尺度

①年齢，学群を訪ねるフェイスシート，②研究担当者の作成した、現在の被服，理想の被服の選択をしてもらう質問（予備調査を実施して選定した、被服の4ジャンル各2枚，計8枚の写真を呈示し、『今着ている服』『本当は着たい服』をそれぞれ一つずつ選択してもらった。）③多元的同一性尺度 MEIS 谷（2001），自己斉一性・連続性，対自的同一性，対他的同一性，心理社会的同一性の4因子各5項目からなり，計20項目の尺度である。④コミュニケーションに対する自信尺度 SCS 畑野（2010），意図伝達・意図抑制・意図理解の3因子からなる，全27項目を使用した。

3. 分析

分析は全て IBM SPSS Statistics 22 を用いて行った。まず得られたデータの基礎統計量を算出し，SCS，MEIS の得点平均値を， t 検定を用いて先行研究と比較した。次に，学年間での各尺度全体，各尺度の下位項目の差について一元配置の分散分析で比較を行った。その後，各尺度全体と下位項目のそれぞれの相関を調べるために相関分析を行った。被服

の4ジャンルについての分析では、『今着ている服』、『本当は着たい服』のジャンルと各尺度得点の比較を一元配置の分散分析で行った。また、『今着ている服』と『本当は着たい服』の選択から、『今着ている服』と『本当は着たい服』の一致、不一致をマッチング群、マッチング×群としてグルーピングを行い、学年と『今着ている服』『本当は着たい服』のマッチングに差があるのかを、カイ2乗検定を用いて比較し、各尺度の得点とマッチングについてt検定を用いて比較を行った。

4. 予想される結果

仮説1：第二の皮膚とも呼ばれる被服の選択において、自分の着ている服と、本当は着たい服に相違があるものは、相違のないものに比べ、コミュニケーションに対する自信も低い。

仮説2：藤原（1986）の研究から明るく活発で外交的な傾向のある人は仲間の多くが着用している服、流行を意識していることがわかっている。外交的でコミュニケーションスキルのある人は、他人に自分をアピールすることができ、このことは被服を通してのアピールも同様であると考えられる。また、神山（1982）は、社会適応的パーソナリティ特性は、スタイル抑制度合と負の関係をもつことを示したと述べている。これらを踏まえ、コミュニケーションスキルに自信のある人は、自分をアピールする派手ガーリーや、派手マニッシュな服装を着用する。

仮説3：質問紙で選択した『今着ている服』と『本当は着たい服』が一致している人は、自分の着たいもの、伝えたいことを認識し、表出できると考える。そのため、『今着ている服』と『本当は着たい服』が一致している人はコミュニケーションスキルも高く、かつアイデンティティも全体的に高い。

5. 結果考察

調査、分析の結果、本研究の仮説は全て支持されなかった。

仮説1は、着たい服を着られているか、着られていないかは個人のコミュニケーションに対する自信に繋がる要因ではなく、他の要因が関係していることが考えられた。

仮説2は、『今着ている服』の4ジャンル（派手ガーリー、派手マニッシュ、地味ガーリー、派手マニッシュ）についてはSCS全体の得点において、派手マニッシュな服装の人は地味ガーリーな服装の人より全体的にコミュニケーションスキルが高いことが示された。また、派手ガーリーな服装をしている人たちは、地味ガーリーな服装の人に比べて、自分の思いを上手く他者に伝えることができるという自信を持っている人たちであることがわかった。しかし、SCSについて派手マニッシュ、派手ガーリーの両方に有意差が認められず、派手な服装の人はコミュニケーションスキルが高いという仮説2は支持されなかった。

仮説3は、アイデンティティとコミュニケーションスキルは、『今着ている服』と『本当は着たい服』のマッチングとは関連がなかった。

この研究の臨牀的、社会的意義として、学校現場において、どのような服装の学生にどのようなコミュニケーションや、アイデンティティの特徴があるのかを推測し、学生指導の一助に繋げていける可能性があることは示唆できたのではないかとと思われる。しかし、『今着ている服』『本当は着たい服』を問う質問は、再度妥当性信頼性の検討が必要である。

引用文献

- Erikson, E. H. (1959). Identity and the lifecycle, New York : International Universities Press.* (エリクソン, E, H 小此木 啓吾 (編訳) (1973). 自我同一性 誠信書房).
- 加藤厚 (1983). 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, **31**, 292-302.
- 曹興彦 (2009). 若者による服装の選択の要因分析 埼玉大学文化科学研究科文化構造専攻修士論文, 1-3.
- 谷冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造 : 多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成教育心理学研究 , **49** (3), 265-273.
- 土井隆義 (2004). 「個性」を煽られる子どもたち—親密圏の変容を考える—岩波ブックレット, 633, 岩波書店.
- 畑野快 (2010). 青年期後期におけるコミュニケーションに対する自信とアイデンティティとの関連性教育心理学研究 , **58** (4), 404-413.
- 藤原康晴 (1981). コミュニケーションとしての被服 : 被服の印象形成, 日本繊維機械学会, Pp. 79-91.
- 藤原康晴 (1986). 女子大学生の被服の関心度と自己概念および自尊感情との関係, 日本家政学会誌, **37**, 493-499.
- 藤原康晴 (1987). 女子大生の好きな被服のイメージと自己概念との関連性, 日本家政学会誌, **38**, 593-598.